

中学校歴史授業における

効果的な ICT 活用

—「広がる社会運動と普通選挙の実現」を例に—

京都教育大学大学院 連合教職実践研究科

教職実践専攻 授業力高度化コース

136024 甫田知彩樹

中学校歴史授業における効果的なICT活用 —「広がる社会運動と普通選挙の実現」を例に—

甫田 知彩樹

授業力高度化コース

要約：社会科の目標は科学的な社会認識形成を通して、市民的資質を育成することである。本研究の目的は歴史的分野の授業において社会事象についての知識を定着し理解させる際の、効果的なICTの活用法を明らかにすることである。また、教職専門実習Ⅱでの「広がる社会運動と普通選挙の実現」の授業実践をICT活用の面から分析、検証していく。その上で社会科の目標である社会認識形成に重きを置いた指導案の再構成を図ることとする。

キーワード：歴史的分野、社会認識形成、教科指導におけるICT活用、資料活用

1. はじめに

中学校社会科においてどのような力をどの程度まで子どもに育成するか、その到達目標はどのように設定されているのだろうか。中学校学習指導要領においては、社会科の目標は以下のように定められている。

広い視野に立って、社会に対する関心を高め、諸資料に基づいて多面的・多角的に考察し、我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を深め、公民としての基礎的教養を養い、国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う。

学習指導要領によると社会科の性格は次の2つの観点からの目標が重要だとされる。①社会に関する知識・理解、②社会や我が国に対する態度・意欲である。この2つの目標はどちらも必要であるが、どちらを優先させるのか、各領域でどのような点を強調するかによって社会科の性格は規定されてきた。①の知識・理解に関する目標を優先する社会科の立場では、社会科の固有の性格を社会認識の育成に見出している。その際、社会の見方、考え方において社会諸科学が参考になる。社会を説明し、事実・事例を関連付ける概念や法則などを見出し、社会を理解することを重視する。②の態度・意欲に関する目標を重視する立場では価値認識形成に重きを置いている。この場合は、授業において社会論争問題などが扱われ、問題解決型の学習を通して生徒自身がそれぞれの問題に対し、価値判断能力を形成していく。

教職専門実習Ⅱでの教職専門実習連携協力校では教科書を開かない生徒、該当箇所を見ない生

徒なども見られ、知識・理解、態度・意欲双方の面での課題があった。生徒が社会に対する知識・理解がない状態では、意欲・態度を育成することはできない。社会科の目標は科学的な社会認識形成を通して、市民的資質を育成することであるが、市民的資質とは公民的資質よりもより広義な概念であると考え。市民的資質の育成は最終的な目標であるが、まず、社会認識形成に重きを置くことが重要だと稿者は考える。生徒にとっては態度・意欲よりも先に社会に関する知識を獲得し、社会を理解していくことが切実であると実習を通して感じた。

教職専門実習Ⅱでは中学校第3学年の歴史的分野の授業を担当した。授業においては教科書や資料等を説明する際に ICT を活用した。教科書などに掲載されている資料を拡大化、焦点化することで生徒に新たな気づきを与えることができ、時代や社会を理解する手助けとなると考えたからである。ICT を活用することにより、従前の授業より生徒が学習に興味を持ち、真剣に取り組む姿や場面が増えたことを実感した。このことから、社会に関する知識・理解に重きを置く歴史の授業を構成する際に、ICT の活用が効果的ではないかと考えた。

また、中学校学習指導要領の歴史的分野の目標は以下のように記されている。

歴史的事象に関する関心を高め、我が国の歴史の大きな流れを、世界の歴史を背景に、各時代の特色を踏まえて理解させ、それを通して我が国の伝統と文化の特色を広い視野に立って考えさせるとともに、我が国の歴史に対する愛情を深め、国民としての自覚を育てる。

ここでは「我が国の歴史の大きな流れを、世界の歴史を背景に、各時代の特色を踏まえて理解させ」とある。その手助けとして、ICT を活用し、教科書などの資料を拡大化、焦点化することで資料から情報を読み取ることが容易になり、生徒に新たな気づきを与え、歴史を理解させることができると考えた。また、ICT を用いて視覚的資料を見せることで、歴史的事象について理解しやすくなり、社会認識形成を促すことにつながる。

また、ICT が学力、意欲に及ぼす効果についても検証されている。平成18・19年度に文部科学省委託事業「教育の情報化の推進に資する研究」による調査研究が行われた。その結果、ICT を活用した授業を実践している全国の小学校・中学校・高等学校におけるテストの平均値と思考、判断、表現、知識、理解のそれぞれの項目において、ICT を活用した場合に高い数値が見られた。意欲、関心に関する質問項目において「楽しく学習することができた」「進んで参加することができた」「今日の学習は満足できた」と、ICT を活用しない場合と比較して、ICT を活用した場合、高い結果になっていた。これらのことから学力、意欲という面においても ICT の活用を一層充実したものとなるように、授業を工夫することが求められると考える。以上のことから、教職専門実習Ⅱでの ICT を活用した授業実践をもとに、社会事象についての知識を定着し理解させる際の

効果的な ICT 活用法とは何か考えていきたい。

2. 研究の目的

本研究の目的は歴史的分野の授業において社会事象についての知識を定着し理解させる際の、効果的な ICT の活用法を明らかにすることである。また、教職専門実習Ⅱでの「広がる社会運動と普通選挙の実現」の授業実践を ICT 活用の面から分析、検証していく。その上で社会科の目標である社会認識形成に重きを置いた指導案の再構成を図ることとする。

3. 研究の方法

最初に社会認識形成および ICT 活用について先行研究より確認する。次に実際に教職専門実習Ⅱで行った歴史の単元「二度の世界戦争と日本」を ICT の活用を通して分析、検証する。その上で「広がる社会運動と普通選挙の実現」の指導案を再構成する。

4. 社会認識形成とは

社会科は「社会認識形成を通して市民的資質を育成する」（棚橋、2007）教科と性格づけられている。最終的な目標としては市民的資質を育成し、社会に参画していく人材へと成長していくことが重要であることがわかる。しかし、まずそのためには、「諸資料に基づいて多面的・多角的に考察」し、「我が国の国土と歴史」について「理解」していくなかで「公民としての基礎的教養を養」うこと、つまり社会認識形成がなされなければならない。

はじめにで述べたように、社会科の①知識・理解に関する目標を優先する社会科の立場では、主に社会認識を形成するのが社会科であり、社会認識形成とは社会に関する見方・考え方を育成するものである。

森分（1978）は「事象や出来事の社会的意味を正しく理解する」ことが社会認識形成の原理であると述べている。つまり、社会認識とは社会科教育の成果として子どもの内面に形成される社会的事象に関する知識体系であり、社会科教育学の中心概念である。その認識・知識は、事実的なものと価値的なものに分けられる。したがって、森分の考える社会認識とは、ある社会事象に関する知識（事実的認識）を獲得し、その獲得した知識をもとにして自らの考え（価値的認識）を生み出すといった認識体系である。

また、森分は学習指導要領社会科では、社会的事象・出来事について4つのレベルの理解を要求していると述べている。

I 事象・出来事の実事そのものの正確な理解（事実の正確な理解）

II なぜ事実・出来事が起こったのかという起源に関する理解（目的論的理解）

III 事象・出来事の社会的意味の理解（社会的意味の理解）

IV 事象・出来事の歴史的意義の理解（歴史的意義の理解）

I からIVを段階的に積み上げていくことによって正しい理解がなされ、社会的認識形成が達成される。

棚橋、森分の先行研究より、「事象や出来事の社会的意味を正しく理解する」ことが社会認識形成において重要であることは述べた通りである。

学習指導要領においても「諸資料に基づいて多面的・多角的に考察し」とあるように資料を適切に収集、選択、処理、活用し、それらの資料に基づいて考察し理解する必要がある。正確な知識、理解を定着させ、社会事象をとらえる際に資料の活用は不可欠であり、ICT の活用が資料を読み解く手助けとなる。効果的な ICT 活用はIIIの「事象や出来事の社会的意味を正しく理解する」ことにつながるのではないかと考える。次の章でICTの活用について検討していく。

5. ICT の活用

5.1 ICT 活用の必要性

ICT 活用の効果については文部科学省「教育の情報化に関する手引」によって示されている。

平成 18、19 年度に実施された文部科学省委託事業による調査研究において、全国で実施された 752 件の検証授業を分析評価した結果では、ICT 活用して授業を行った教員の 98,0%が、「関心・意欲・態度」の観点において効果を認めていた。それ以外の観点（知識・理解、思考・判断、表現・技能・処理）や、ICT 活用によって児童生徒が集中して取り組めるようになることや児童生徒が楽しく学習出来るようになること等についても、多くの教師が効果を認めていた。

このように ICT の効果についてその有用性が認められている。ただ、ICT を単にどの場面でも使用すればいいというわけではない。どのような場面でどのような ICT を、どのように活用するとどのように効果があるのかという点を実証することが必要とされている。

教職専門実習 II において、ICT を活用し写真や映像を見せた時生徒の意欲・関心が高まった瞬間が多く見られた。メディアの初頭効果による意欲の高まりというのは大きい。しかし、それも慣れれば効果は薄くなる。ICT はそれぞれの場面で適切に活用し、生徒の意欲を喚起させること

が求められる。

5.2 ICT の機能

ICT の効果的な活用にあたり、その機能や使い方について考えていく。浅井（2011）が授業実践において指摘する ICT の機能を参考にして、その中の主な機能 6 つについて、自身の教職専門実習Ⅰ、Ⅱでの経験を踏まえてまとめた。

- (1) 大きくうつす (2) 印象づける (3) 動画と音声の活用
- (4) デジタルとアナログの併用 (5) デジタル学習環境の開発
- (6) 子どもが主体的に活用する

(1) 大きくうつす：ICT のメリットとしてまず挙げられるのが、小さなものを大きくうつせることである。教科書や資料集、写真、新聞記事、グラフなどを電子黒板や大型ディスプレイ、プロジェクタなどで大きく見せることによって、学習情報を一斉に提示できるため、生徒の注意が向き、情報が全体に共有される。見せたい部分を拡大化、焦点化することにより、そこから情報を読み取ったり、新たな気づきが生まれたりする。

(2) 印象づける：教師が強調したい資料、グラフ、地図、肖像などについて、印をつける、文字の色を変える、並立して比較させるなど提示の仕方を工夫することで強く印象づけることができる。動画だとさらに強く印象づけられる。動画では着目してほしい点をあらかじめ説明し、「この映像で〇〇なところが 3 つある。探してみよう」など発問を工夫することで生徒の意欲を喚起することもできる。

(3) 動画と音声の活用：実際に映像や音声を聞くことによってよりわかりやすくその時代をイメージすることができ、理解につながる。第二次世界大戦やヒトラーの演説の映像を見たりすることで、直接的な体験が不可能な事象であっても、その当時の歴史のイメージをすることがより容易になる。映像の持つ情緒的特性を生かして、生徒自身の感性に訴えかけることができ、主体的に思考させることができる。動画は NHK の提供しているデジタル教材などを活用することも有益である。

(4) デジタルとアナログの併用：ICT を活用することで生徒の注意を引きつけ意欲を高め、理解を促すことができる反面、それらの資料は画面が変わると消えてしまうというデメリットがある。そこで、アナログの良い点をもって相互補完的に活用すべきである。例えば、授業の大事なポイントや流れなどは適宜板書をし、黒板を見れば授業の流れがわかるようにする。また、資料で特に重要なものは後日プリントにして配布するなどの配慮も効果的であろう。デジタル教材で印象づけ、プリントやノートなどのアナログ媒体でまとめを行うなどそれぞれのメリットを生かすこ

とで、学習が効果的になると考える。

(5) デジタル学習環境の開発：学校によって ICT 機器の整備の環境は異なる。デジタル教材を教師が開発したり、ICT 機器の活用法について学校内でスキルを共有したりすることで、学校全体での学習効果を高めることができるだろう。

(6) 子どもが主体的に利用する：タブレット端末で写真や映像を撮る、パソコンで発表の資料をまとめる、インターネットで調べるなど生徒自身が ICT を活用することによって意欲的に、主体的に学習することができる。その際にメディアリテラシー、情報モラルなどを学習することも重要である。

以上、6つの視点から、教職専門実習Ⅱにおいての実践についてまとめていきたい。

5.3 ICT 活用の実践例

教科書は東京書籍「新しい社会 歴史」、単元は「二度の世界戦争と日本」の「アジアの民族運動」から「日中全面戦争」である。

(1) 大きくうつす：教科書にある資料や自ら集めた資料からパワーポイントでスライドを作成、大型ディスプレイで提示した。導入、展開において毎回大きくうつすという機能を取り入れた。

実践例	アジアの民族運動	五・四運動で民衆がデモ行進をしている教科書の絵の掲げている弾幕の文字を拡大して読み取る。
	大正デモクラシーと政党内閣の成立	米騒動の様子を描いた資料を焦点化して映す。そこから民衆の様子を読み取る。米騒動を伝える新聞記事を拡大し、「女一揆飛び火す」「富山の騒動」などの箇所の記事を読み取り、米騒動の実態を掴む。

(2) 印象づける：注目させたい箇所に印をする、実物の写真を提示することで強調した。

実践例	世界恐慌とブロック経済	職を求める失業者が持つプレートの英語をわかりやすく書き直し、日本語訳をつけ、段階を経て読み取れるようにし、強く印象づける。
	新しい文化と生活	小林多喜二『蟹工船』を紹介する時に肖像と本の表紙と共に小林多喜二の短い説明を入れる。実際に実習先の図書館にあった漫画版の『蟹工船』の実物を提示、表紙、中身をパワーポイントで見せて印象付けた。

(3) 動画と音声の活用：DVD『映像の世紀』を適宜使用した。

実践例	世界恐慌とブロック経済	世界恐慌前後のアメリカの映像を見ることで当時の様子を知り、世界恐慌がなぜ起きたのかの理解につなげる。
	欧米の情勢と	ヒトラーの選挙活動の様子やヒトラーの演説、ゲルニカへの攻撃の映像

	日本	を見てファシズムの台頭や戦争の悲惨さを理解させる。
--	----	---------------------------

(4) デジタルとアナログの併用：毎回 ICT を活用した授業を展開し、授業の流れは黒板を見ればわかるよう心がけた。デジタル教材で提示した中でも重要な情報は教師の板書と生徒のノートの両方に設定したメモ欄を活用してまとめさせた。

実践例	新しい文化と生活	教科書の資料を大型ディスプレイで写して注目させると同時に、教科書で大事なところにはマーカーを引かせた。
	日本の中国侵略	まとめはノートの他にプリントを使用した。

(5) デジタル学習環境の開発：今回の実習では実践するには至らなかった。毎回の授業で大型ディスプレイを活用したため、教室ではなく視聴覚教室での授業を行った。

(6) 子どもが主体的に活用：子どもがインターネットを使って調べ物をしたり、電子黒板やタブレット端末を使って発表したりするといった活用は今回できなかった。

特に授業において (1) (2) の視点を取り入れ ICT で資料を見せる際に、拡大化、焦点化したのが、事象・出来事の社会的意味の理解を促すような ICT 活用だったのかという疑問が残った。

6. 指導案の分析

教職専門実習Ⅱでは中学3年生歴史的分野、単元は「二度の世界大戦と日本」の中の「アジアの民族運動」から「日中全面戦争」の授業を担当した。その中で「広がる社会運動と普通選挙の実現」の授業で実践した指導案について分析する。

中学校学習指導要領解説社会編においては内容の取扱いは次のようになっている。

オ 第一次世界大戦への背景とその影響、民族運動の高まりと国際協調の動き、我が国の国民の政治的自覚の高まりと文化の大衆化などを通して、第一次世界大戦前後の国際情勢及び我が国の動きと、大戦後に国際平和への努力がなされたことを理解させる。

デモクラシーの高まりから女性運動、部落解放運動などが起き、弱い立場の人々の権利が主張されだした時代である。政治の面でも普通選挙法が成立するという民主主義社会において極めて重要な授業内容でありながら、生徒たちの意欲が持続しにくい箇所でもあった。

「デモクラシーの風潮はどのような運動に発展していったのか考えよう」という目標を立て授業を行った。実際の指導案から社会認識と ICT の視点から分析していきたい。

この授業における成果は ICT を活用し生徒の身近にある児童館の水平社宣言の写真を提示した際に生徒の意欲が高まり、高い集中が見られたことである。授業後の感想にも「児童館の水平社宣言が印象に残った」と書いている生徒もいた。

一方で、課題は大きく 4 つある。1. 社会認識形成を促す目標設定ではなかったこと、2. 導入での生徒の意欲喚起が不十分であったこと、3. 有権者数増加のグラフの提示の仕方に問題があったため、資料の読み取りが不十分であったこと、4. 授業展開が教科書に沿ったもので一つ一つの資料のつながりがなかったことである。

1. 目標の設定においては社会認識形成に必要な社会事象における法則性や概念の獲得、事象の社会的意味を理解させるという目標が達成できるものではなかった。そこで、事象・出来事の社会的意味を理解させる目標へと改善する必要がある。当初は教科書に沿った目標「デモクラシーの風潮はどのような運動に発展していったのか」を、「大正時代はどのような時代だったのか理解しよう」と変更する。目標達成のための ICT 活用として、事象・出来事の社会的意味を理解するために ICT を使用する。どのような社会であったのかを補足するための資料を、ICT を活用して提示することで社会に対する知識・理解が深まり、大正時代を理解させることができる。

2. 意欲喚起が不十分だった点においてはメーデーの写真を提示したが生徒にとって親しみやすいものではなかった。より生徒にとってイメージしやすい身近なものや特定の人物から、生徒の意欲を喚起するものにつなげたい。

3. 有権者数のグラフの提示において ICT の活用は行ったが、その見せ方に課題があり、読み取りが不十分であった。グラフの数値に着目できるようなマークをつけるなどの工夫が必要である。

4. 授業展開が教科書に沿ったものでそれぞれの資料のつながりが見えにくいものになってしまった。授業展開を改善し、より効果的なものにしたい。

以上の課題を踏まえた上で指導案の再構成を行う。

7. 指導案の再構成

	学習 内容	主な発問・指示	予想される発言、 思考、活動	資料
導入 5 分		○平塚らいてうの若い頃の肖像を ICT で提示し教科書と比較させる ○平塚らいてうについて説明する ○当時女性差別があったことを説明する	平塚らいてうが女性差別解放の運動をしていたことを知る	【平塚らいてうの肖像】 若い頃の平塚らいてうの肖像画を大きくうつし、印象づける。女性運動の代表者として平塚らいてうという特定の人物をあげ、現在の女性の社会進出とからめて興味づけをする

		発問：女性運動などの社会運動がこの時代に起こったのはなぜだろうか。 その運動の結果、社会はどのように変化したのか、現在の社会にどのような影響を与えたのか考えてみよう		
展開 1 20 分	女 性 運 動 の 台 頭 解 放 運 動	○新婦人協会、青鞥社について説明する ○青鞥社の宣言を音読させる ○部落の人々の差別について説明する ○全国水平社について説明する ○水平社宣言を音読させる ○水平社を結成した西光万吉の生涯と結成の経緯について説明する ○児童館の水平社宣言を提示する ○アイヌの人々への差別について説明する	大きく提示し一斉に注目させ音読させることで印象づける 福岡市でのビラ。京都から始まった運動が全国に広まったことを読み取る 西光万吉の経歴から水平社結成までの経緯を知る。人物を提示することで興味づけと具体的な差別の状況が想像できる 身近な例で意欲喚起させると共に、部落解放運動が現在にまで影響を与えていることを意識させる 実物を大きく見せて印象づける	【新婦人協会の第一回会議】 【青鞥の表紙】 二つの資料を合わせて提示し、女性運動が盛んになってきたことを示す 【青鞥社の宣言】 【茨冠旗】 マークの由来を説明し印象づける 【全国水平社大会のビラ】 【水平社宣言】 大きくうつす 【西光万吉の肖像と言葉】 【児童館の水平社宣言の写真】 【アイヌの民芸品】
展開 2 20 分	社 会 運 動 の 広 がり	○メーデーとビラの写真を提示する ○労働争議が全国で起きていたことを説明する ○大正時代がどのような時代だったのか考えさせる	労働争議が全国に広がっていったことを理解させる デモクラシーの高まりにより民衆が立ち上がり、社会	【第一回メーデーの写真、ビラ】 労働争議のために上野に多くの人が集まったことを知る 【工女解放運動の写真】【川崎・三菱両造船所での労働争議】 【国会議事堂を取り巻く民衆】 人々が政府に要求をつきつけた時代であることをおさえる

	男子 普通 選挙 の実 現	○大正時代の選挙権について考えさせる ○普通選挙法成立について説明する ○有権者数のグラフからわかることを読み取らせ、ノートに書かせる ○治安維持法について説明する	運動によって権利や生活の向上を求めた時代。政治参加を求めた時代 文字を拡大、焦点化し現在の投票率の低下とあわせて考えさせる 増加、25歳以上の男性に選挙権など	男性の有権者数の増加を読み取る 【投票所からあふれる人々】 【第一回普通選挙のポスター】 【有権者数増加のグラフ】 数値に着目できるように数値に印を入れたものを用意、生徒の実態に合わせ適宜提示する。男性の有権者数が約4倍になったがまだ有権者数は20%、女性にはまだ参政権がないなど具体的に読み取らせ、選挙権は獲得してきたものであると現在の選挙権についても考えさせる
まとめ 5分		「女性運動などの社会運動がこの時代に起こったのはなぜだろうか。その運動の結果、社会はどのように変化したのか、現在の社会にどのような影響を与えたのか」についてノートにまとめさせる	デモクラシーの高まりの中で女性運動、労働運動などが広がり、普通選挙法が成立。この時の普通選挙法成立が普通選挙の第一歩となったなど	まとめはノートに書かせることによって生徒に思考させる

8. 考察

この授業での目標は「大正時代はどのような時代だったのか理解しよう」と設定し、「女性運動などの社会運動がこの時代に起こったのはなぜだろうか。その運動の結果、社会はどのように変化したのか、現在の社会にどのような影響を与えたのか考えてみよう」と発問し、社会事象について考えさせ、理解させるように改善した。

導入部分では「平塚らいてう」という女性運動家の若い頃の肖像画を大きくうつし、教科書の肖像画と比較し印象づけ、興味づけを行う。全国水平社大会のビラ、メーデーや工女らの写真などの資料は、それぞれの資料の意味を考えさせるために拡大、焦点化を行った。そのことにより事象・出来事の社会的意味、歴史的意義の理解を促すことができる。

また、有権者数の増加のグラフの読み取りについては具体的な数値に着目できるように数値に印を入れたものを用意し、生徒の実態に合わせて適宜提示するようにした。資料の読み取りから当時の社会について理解し、現在への影響についても考えさせる。それぞれの資料の意味づけを行い同時に関連させ読み解くことによって、当時がどのような社会・時代だったのか考察させる授業となっている。

9. 研究の成果と今後の課題

研究の成果としては、ICTの効果的な活用によって、社会認識形成に必要な事象・出来事の社会的意味に加えて事象・出来事の歴史的意義の理解を促すことができる授業案を作成できたことである。この授業での社会的意味とは大正時代がどのような時代だったのかを理解することであり、歴史的意義とは普通選挙法が成立し、それが今に影響を与えていることを理解することである。

課題については、再構成した指導案について実践、検証することができていない点である。今後、本研究においての成果である指導案をもとに、授業を実践、検証していきたい。

また、今回は教師側のICT活用にとどまったが、今後は生徒が主体的にICTを活用していく授業を考えていきたい。電子黒板やタブレット端末を教師だけでなく生徒が用い、資料を調べたり、考えたり、発表したりする、市民的資質を養うような社会科授業について模索していきたい。

引用文献

- 浅井和行（2011）「授業におけるICTの活用 <特集>ITが教室にやってくる」『情報処理センター年報』2010、pp.5-8
- 棚橋健治（2007）『社会の授業診断 よい授業に潜む危うさ研究』明治図書
- 日本社会科教育学会編（2000）『社会科教育事典』
- 森分孝治（1978）『社会科授業構成の理論と方法』明治図書
- 文部科学省（2008）『中学校学習指導要領解説 社会編』日本文教出版
- 佐賀県教育センター
- http://www.saga-ed.jp/jouhou/ict_support/jyugyoujisen/jy（最終閲覧日 2015/01/04）
- 文部科学（2010）『教育の情報化に関する手引』
- http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/___icsFiles/afieldfile/2010/12/13/1259416_8.pdf（最終閲覧日 2015/01/07）

参考文献

- 有光威徳（1992）『視聴覚教育メディアの活用』日本視聴覚教材センター
- 伊藤之尾（1992）『岩波ブックレット＜日本近代史＞大正デモクラシー 民衆の登場』岩波書店
- 岩田一彦（2001）『社会科固有の授業理論・30 の提言―総合的学習との関係を明確にする視点―』明治図書
- 五味文彦、戸波江二、矢ヶ崎典隆（2013）『新しい社会 歴史』東京書籍
- 創育/吉野教育図書事業部（2014）『歴史資料年表』創育
- 高橋純、堀田龍也編著（2009）『すべての子どもがわかる授業づくり―教室で ICT を使おう―』高陵社書店
- 星村平和監修・金子邦秀編著（1992）『新中学校社会科授業方略の理論と実践 歴史編』清水書院